

資金使途違反について

今回のテーマは「資金使途違反」についてです。金融機関から借入を行う際には、資金使途（資金の使い道）を明確にしなければいけません。そしてその借入した資金は金融機関と約束した資金使途通りに使わないと「資金使途違反」となり、金融機関との信頼関係が損なわれ、今後の融資にも影響してくることとなります。

1. 資金使途違反とは

金融機関からの借入については、申込時に資金使途（何に使うのか）を明確にし、銀行はその妥当性を審査し貸出実行をします。この申込時に約束した使い道と実際の使い道が異なることを資金使途違反と呼びます。

そもそも資金使途の主な区分としては運転資金と設備資金に分けられます。運転資金は事業を運営する上で必要な資金となり、主に商品の仕入や人件費の支払等に充てられることとなります。一方で設備資金は機械の購入や店舗改装、車両の導入等主に固定資産への投資に充てられることとなります。

2. よくある違反の具体例

資金使途違反は悪意がなかったとしても、代表者が知らなかった等のケースで結果的に違反となってしまうケースもあります。

- ・流用：運転資金として借入した資金を急に必要となった機械購入に使ってしまうケース。
- ・充当：前向きな仕入資金として借入したが、他行で借入しているものを完済した場合等。
- ・私的流用：運転あるいは設備資金として借入した資金を、社長個人の住宅ローン返済や投資（株式等）に回したケース。

3. 違反がなぜ分かるのか？

金融機関は貸出実行して終わりということではなく、実行後もモニタリングを実施しており、隠し通すことは極めて難しいです。

試算表・決算書を確認することはもちろんですが、預金の明細を確認して資金使途通りに使われているかの確認を行います。

また設備資金の場合であれば領収書や振込明細の控えの提出が条件となっております。また実際に現地調査を行い、機械導入や店舗改装がされているか等の確認も行うこととなります。

4. 資金使途違反が発生すると

資金使途違反は金融機関取引においては絶対に許されない事項であり、金融機関の立場からすると資金使途は融資判断を行う上で重要な項目の1つです。理由としては資金使途通りでないことと約束通りに回収できない可能性が高まる等の貸倒リスクが発生する為であることから、明確にしておく必要があります。

仮にどんなに財務指標が良くても資金使途違反が一度でも発覚すると「一括返済」「新規融資の停止」等の非常に厳しい対応を受けることとなり、経営に多大なダメージを与えることとなります。

5. 最後に

資金使途違反は単なる手続きのミスでは済まされず、金融機関との信頼関係が大きく損なわれることとなります。金融機関に借入申込や相談をする際には正直に資金使途を伝えること、もし経営状況等の変化で使途をどうしても変えたいといった場合には事前に金融機関へ報告する等、真摯な対応をしていけば資金使途違反になる可能性も低くなります。

金融機関と伴走し会社を成長させていくためには、金融機関との信頼関係が無ければ成り立ちません。財務指標を改善し、事業の信頼を得ることはもちろん大事ですが、会社を守る為にも原理原則通りの融資取引を行っていきましょう。